

大井川流域における語の地理的分布の変化

木川 行央

1. はじめに

静岡県中部を流れる大井川は、南アルプスの間ノ岳を源とし、駿河湾に注ぐ全長160キロに及ぶ川である。川の上流部は急流が険しい溪谷を作っており、平野部は下流の扇状地のみであるため、その長さ に 比して流域面積は狭い。行政的には、最上流域の井川を除き、大井川が駿河国と遠江国の国境であった。明治以降も安倍郡であった井川を除き、右岸は榛原郡、左岸は志太郡と郡境となっていた。また、交通の面では江戸時代、架橋・通船が禁じられていた。さらに上記のように扇状地以外は険しい溪谷であるため、川沿いの道は長く整備されなかった。そのため、中・上流域は山越えで東西すなわち、東の静岡市内や西の森町へ通じる道がよく利用されていた。言葉の面では、西日本の方言と東日本の方言の境界にあたる。

この地域の言語の地理的分布については、日本全国を対象とする国立国語研究所（1966）～（1975）（以下LAJ）、静岡県全域を対象とする静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会編（1988）以外では1974年から1984年にかけて静岡大学方言研究会によって行われた調査の結果を示した木川（1997）～（2006a）がある。静岡大学方言研究会の調査は大井川の東を流れる安倍川流域（平成の大合併以前の静岡市全域）の調査に次いで行われたもので、大井川流域の調査で使用した調査票は、安倍川流域の調査で使用した調査票に調査項目を追加したものである。

静岡大学方言研究会の調査から30～40年経過した2012年から2015年にかけて大井川流域において、その後の変化をみる調査を行った。調査票は静岡大学方言研究会の大井川調査で使用したものに若干の変更を加えたものを使用した。調査地点は、1974-83年調査の調査地点と同じ地点での調査を目指したが、実際には調査を行えなかった地点、別の集落が調査地点となった場合もある。この調査の結果の一部を報告したものには、太田（2017）・木川（2017）が



図1 調査地域

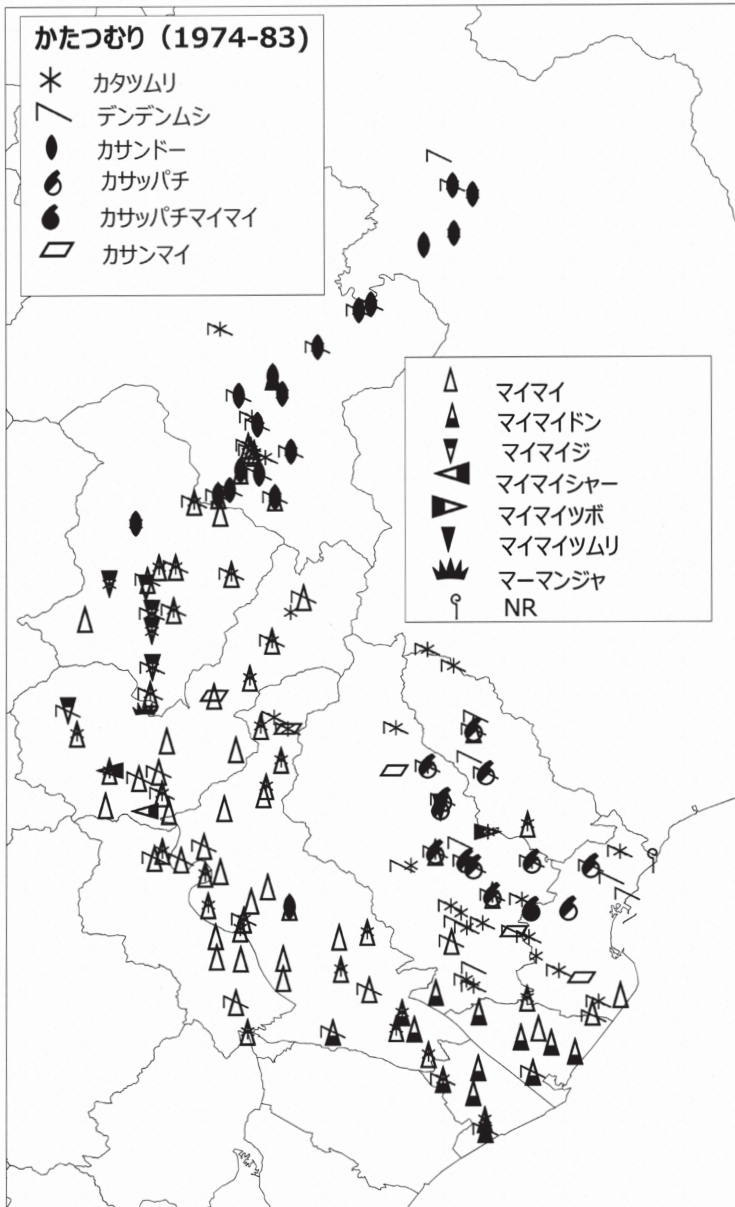


図2 かたつむり (1974-83年調査)

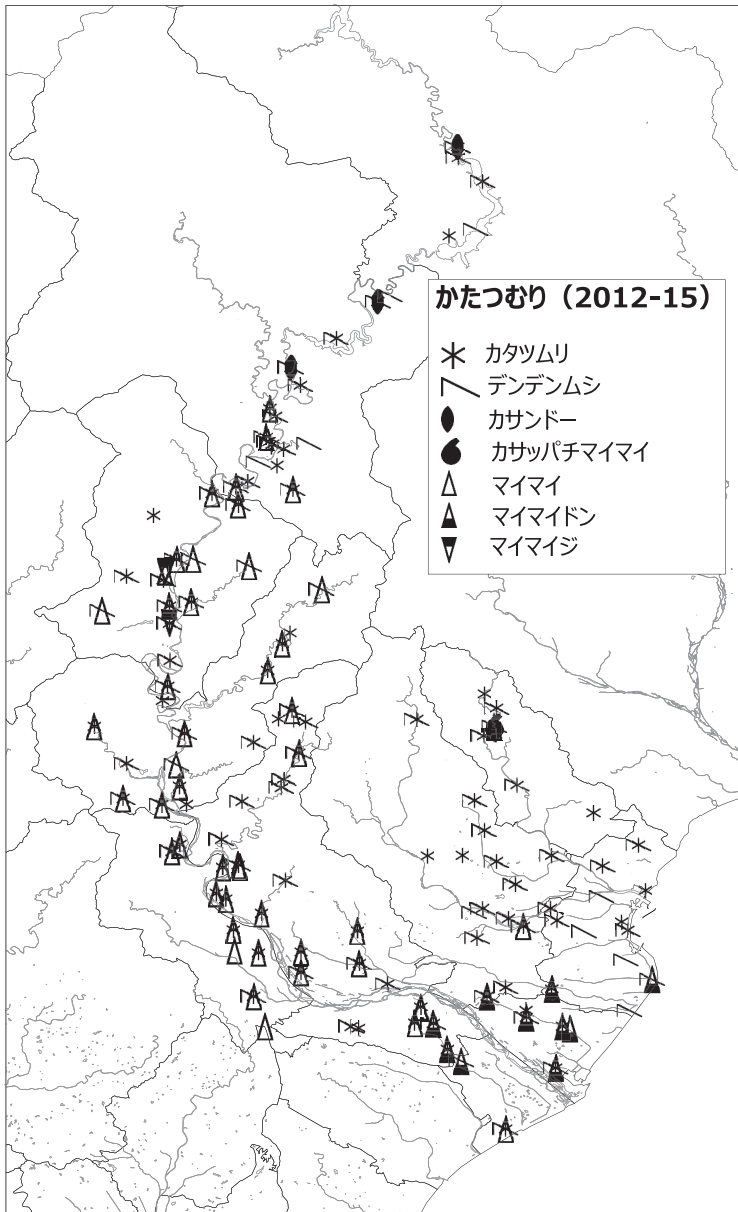


図3 かたつむり（2012-15年調査）

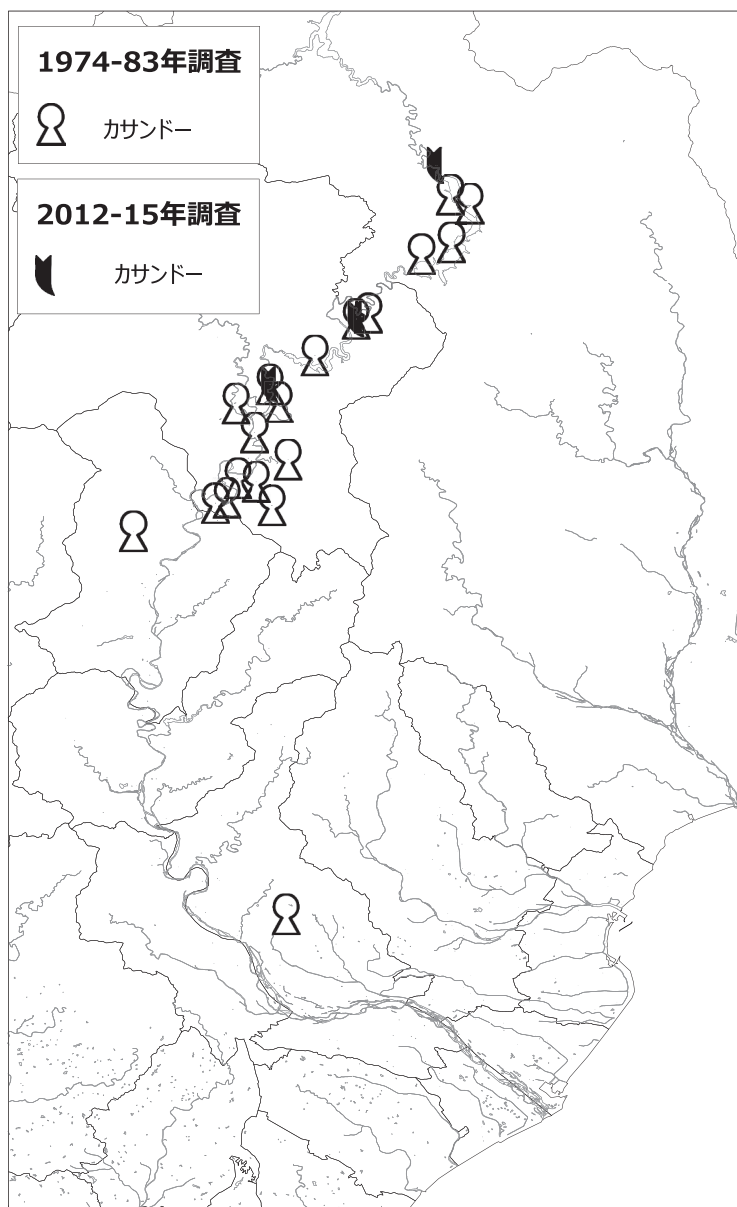


図4 カサンドーの分布域の変化

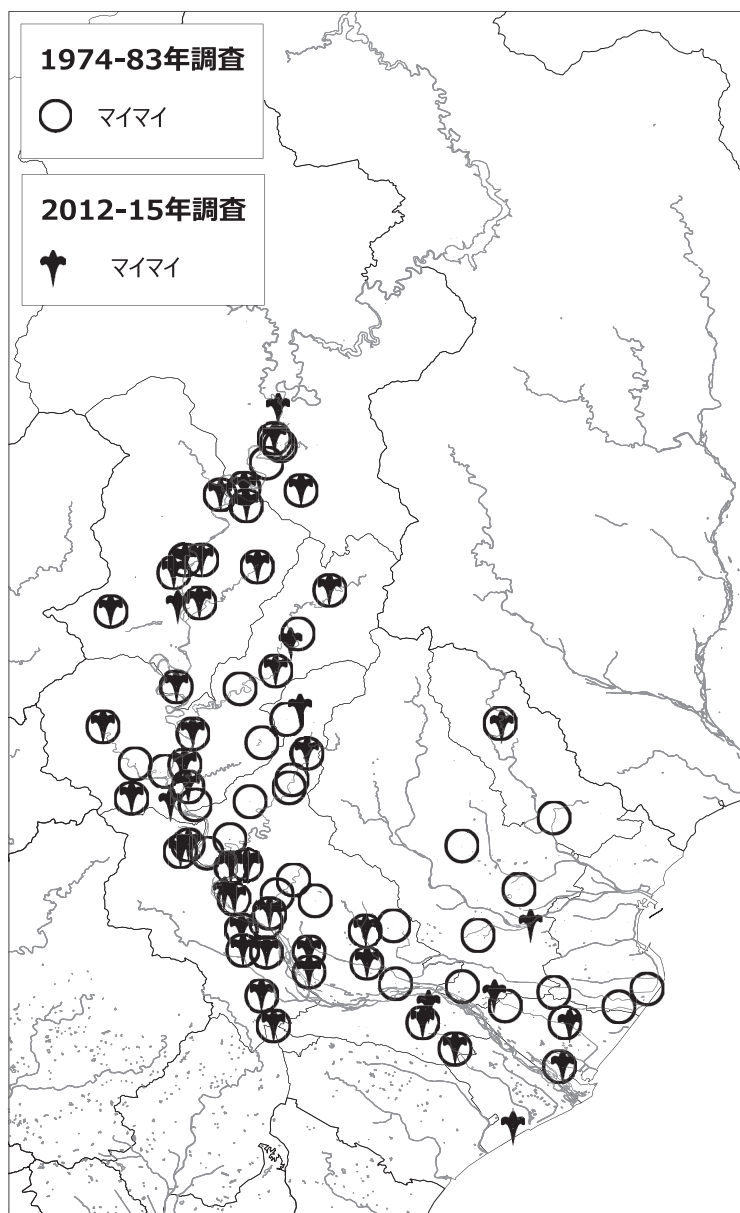


図5 マイマイの分布域の変化

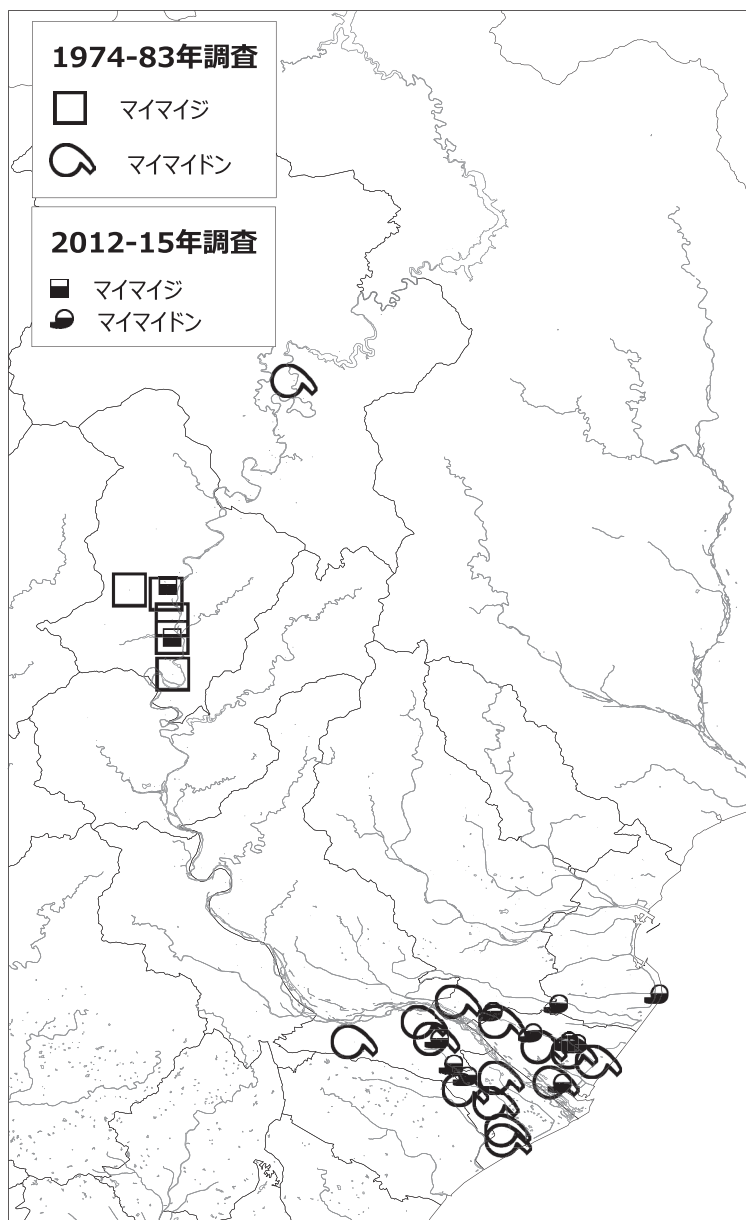


図6 マイマイジ・マイマイドンの分布域の変化

ある。この調査の概要や大井川流域については、これらを見ていただきたい。本稿は、この調査（以下2012-15年調査）の結果と静岡大学方言研究会の調査（以下1974-83年調査）の結果を比較し、大井川流域において語の地理的分布が30年間でどのように変化したかを、「かたつむり」「かなへび」「肩車」の3項目について見るものである。

安倍川流域の調査も含めた調査地域は図1に示す。地名は、平成の大合併以前のもので、以下も同様である。

2. かたつむり

まず、「かたつむり」を表す語の変化について見る。図2が1974-83年調査の結果、図3が2012-15年調査の結果である。

1974-83年調査の結果を見ると、主として本川根町以北にカサンドーが、中下流域にはマイマイおよびマイマイが変化したと考えられる語が分布している。東の安倍川流域ではマイマイは下流域にわずかに分布しているが、大きな勢力を持っておらず、カサンドーが中上流域に広く分布している。さらにカサンドーは、LAJでも静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会編（1988）でも、安倍川・大井川流域のみに見られる語である。そこで、木川（1997）では、大井川上流域のカサンドーの分布について、安倍川流域では上流域にも広くこの語が分布していることから、二つの可能性があるとした。一つは大井川流域においてもかつては上流域にまでカサンドーが分布していたが、その後マイマイが下流から伝播していったという過程、もう一つは大井川流域はマイマイあるいはその他の語が分布していたが、中上流域に安倍川流域から峠を越えて伝播してきたという過程である。そしていずれが妥当な考え方であるかについての判断は保留した。

さて、2012-15年調査の結果を見ると、まず本川根町と井川で勢力を持っていたカサンドーが非常に少なくなっている。図4は1974-83年調査と2012-15年調査の結果のうち、カサンドーのみ取り出し比較したものである。上述のように、1974-83年調査の時点では隣接する安倍川流域におけるカサンドーの分布域は非常に広い。つまり、隣接地域に広く分布域を持っている語であるが、この30年間で急速に消滅に向かっていることになる。ちなみに、2004年本川根町小長井で行った多人数調査（木川2006b）で、カサンドーという語を知っ

ているかの調査を行ったが、本川根町出身・町外出身を問わず、この語を知っているという回答はなかった。

カサンドーの減少以外の変化としては、回答語形の種類が減少している、すなわち1974-83年調査の時点ではあった語形が30年後には消えてしまったという点がある。たとえば、カサッパチ・カサンマイがなくなっている。カサッパチは、1974-83年調査では、藤枝市・焼津市の東部および岡部町に分布している。この語は東に隣接する安倍川下流域に分布するものであり、さらに県東部にまで分布する語であるが、2012-15年調査では回答がなくなっている。ただし、カサッパチを前項とするカサッパチマイマイが1地点で見られるのが、この分布の名残と言えるであろう。

カサンマイはカサッパチないしカサンドーとマイマイの混淆によるものと推測されるが、この語もカサッパチ同様、安倍川下流域にも分布していたが、2012-15年調査によると大井川流域では全く見られなくなっている。

このように、かつて分布していたカサンドーやカサッパチ・カサンマイは極端に減少するあるいは見られなくなっているが、マイマイの分布域はあまり変化がない（図5）。ただし、島田市・藤枝市・岡部町・焼津市においては地点数が減少している。また、マイマイが語の一部となる、マイマイシャー・マイマイツボ・マイマイツムリも2012-15年調査では見られない。その一方、大井川最下流域に見られるマイマイドン、中川根町に見られるマイマイジは2012-15年調査でも、おおよそ同じ地点で回答が得られている（図6）。特にマイマイジは1974-83年調査でもさほど広く分布していた語形ではないが、30年経過した後でも回答が得られている。

かつて用いられていた語が用いられなくなった後、用いられるようになったのは、カタツムリあるいはデンデンムシである。両語とも用いるとする地点が多いが、いずれを多く用いるかは、地点により異なる。ただ、新古については回答しているところでは、デンデンムシの方が古いとする地点が多い。ただ、これを地図から確認することは難しい。

以上見てきたように、かつての分布と比較したとき、広く分布していた語あるいは隣接地域に分布している語であっても、その分布が減少する場合がある一方、さほど広い分布域を持っていたわけではない語でも、ほぼ同じ地域で回答が得られることもあり、かつての勢力と現在の残存の姿が必ずしも一致しな

いということが確認できる。

なお、大西編（2016）によれば、全国的にカタツムリ・デンデンムシ以外の語形は用いられなくなっている。上記マイマイについても用いるとした地点は少なくなっている。この変化はますます進行していくものと考えられる。

3. かなへび

「かなへび」と「とかげ」は、外見の類似から、語の上で区別しない地点が多い。ここでは、以下に見るヘーピーバーサンが「かなへび」に用いられることが多いこと、またよく見るのは「かなへび」であるとの情報が多いことから、「かなへび」の地図を取り上げる。図7が1974-83年調査、図8が2012-15年調査の結果である。まず分かるのは、「かたつむり」と同様、語の種類が減少していることである。特に、トカゲに類した語形で言えば、トカゲに促音が挿入したトッカゲは2012-15年調査でも広く分布している（図9）が、語末の母音が/o/であるトカゴがなくなり、トッカゴのみとなり、そのトッカゴも図10のように、地点数が減少している。さらに、語末が/i/のトカギ・トッカギは回答がなくなる（木川2006bによれば、本川根町小長井でトッカギを回答したのは、本川根町出身で1927年生まれ的女性1名のみであった）。

『日本言語地図』によると、トッカギのように/i/で終わる形は、近畿地方の南部や四国などに見られるが、トッカゴのように/o/で終わる語は、この地域以外には見あたらない。内田1936でも、トッカギはこの地域の他に、静岡県西部・東部にもあるが、トッカゴ・トッカゴーは静岡・安倍と本川根町である東川根と上川根のみである。従って、トッカゴは、この地域で独自に発生させた語形であると考えられるのに対し、トッカギは独自発生の可能性もなくはないが、他地域から伝播してきた形である可能性が高い。

トカゲに類する語の安倍川・大井川における分布について、木川（2001）では、以下のように考えた。すなわち、まずトッカゴは旧市内で発生した。その後の伝播、特に大井川流域における分布については、上述のカサンドーと同様、二つの可能性が考えられる。一つは、旧市内から安倍川流域を上流に向かって伝播していく一方、西にも向かい、大井川下流域に達したところで、上流に向かって伝播していき、その後トッカギの伝播により、トッカゴは上流域にのみ残ったとする考え方である。もう一つの考え方は、大井川流域はトッカギが分布して

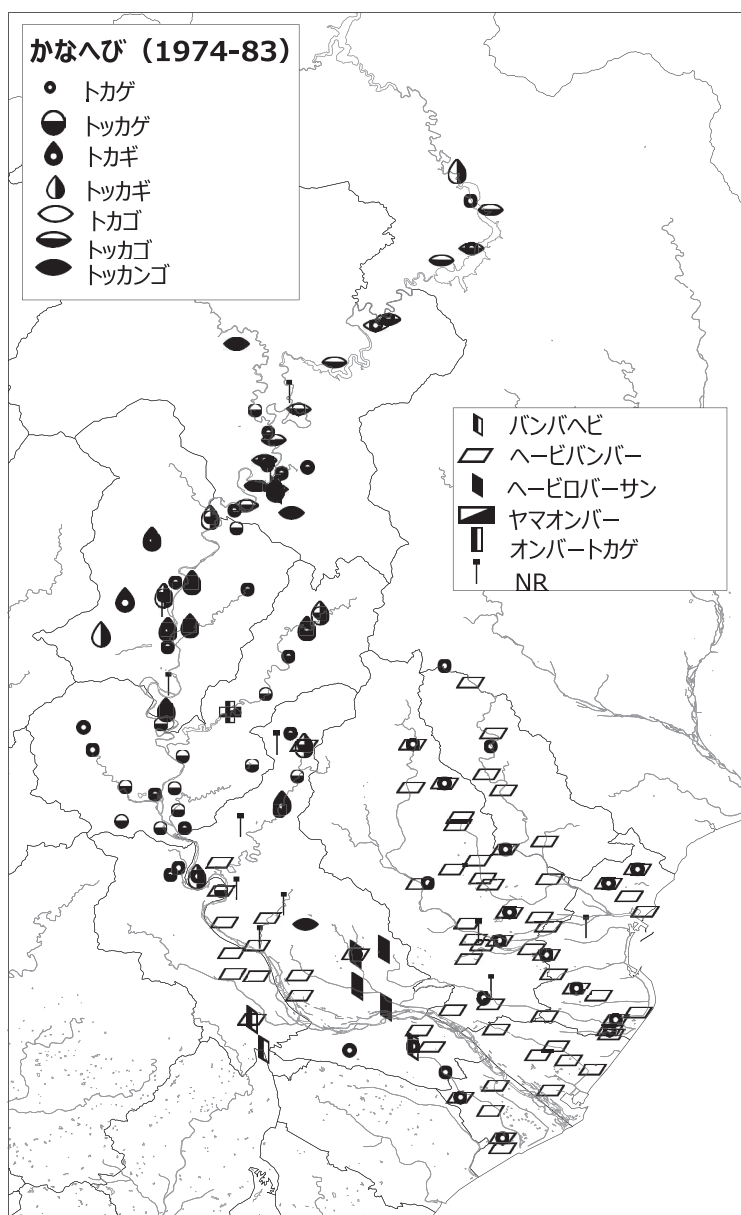


図7 かなへび (1974-83年調査)

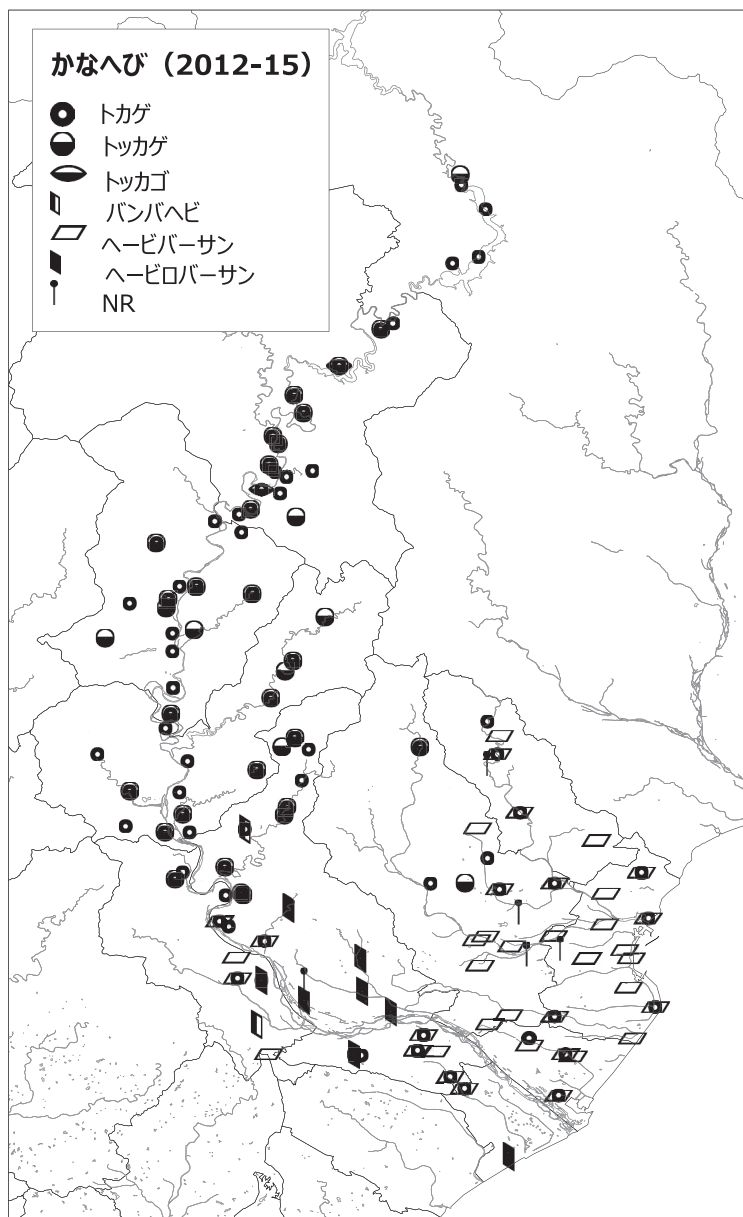


図8 かなへび（2012-15年調査）

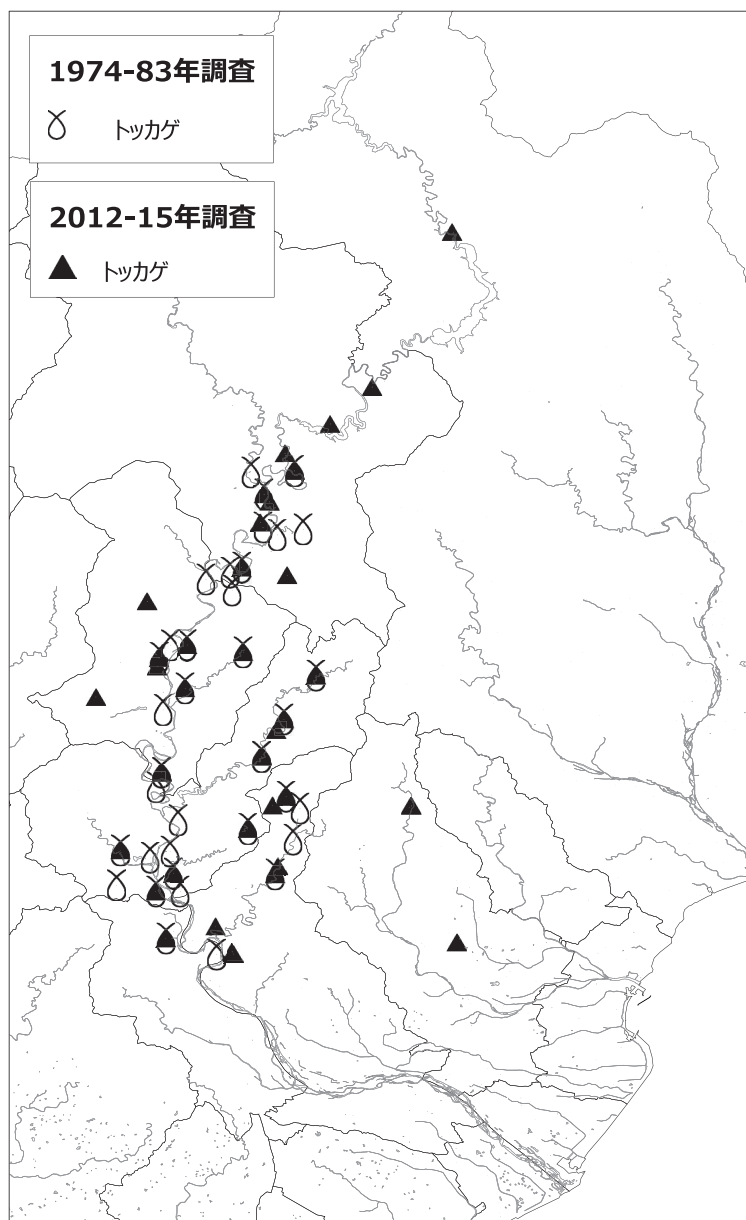


図9 トッカゲの分布域の変化

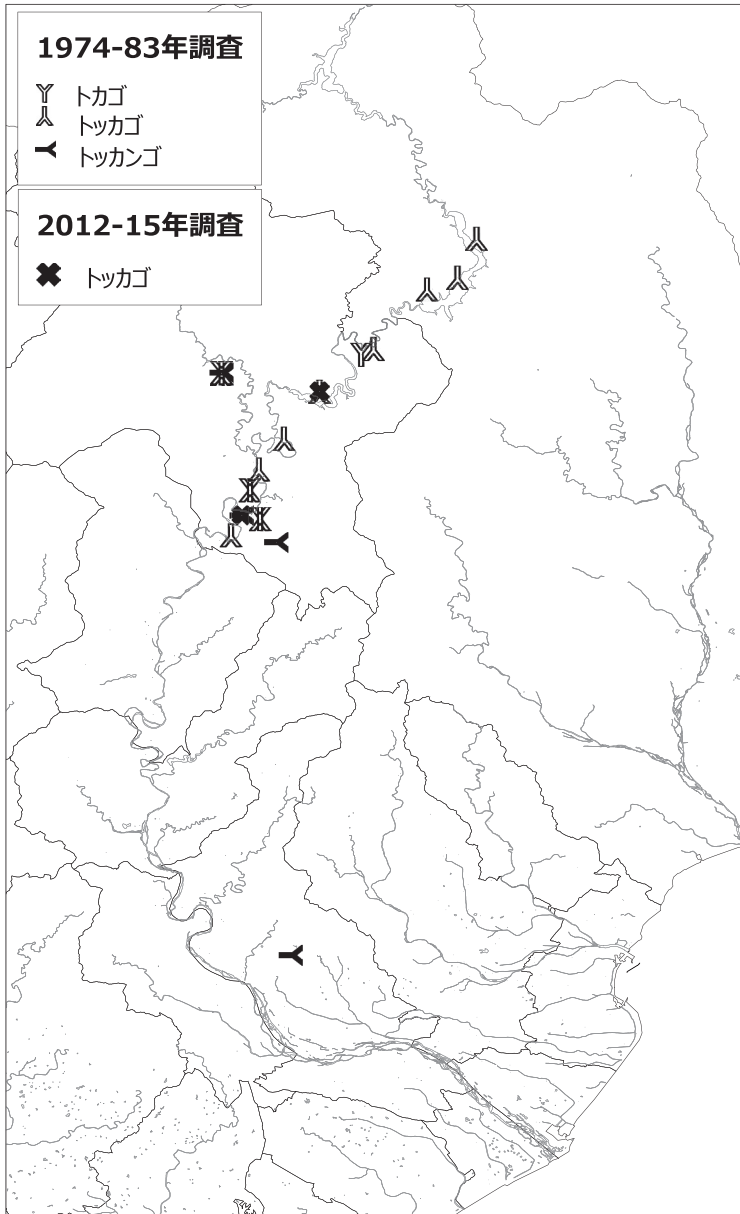


図10 トッカゴの分布域の変化

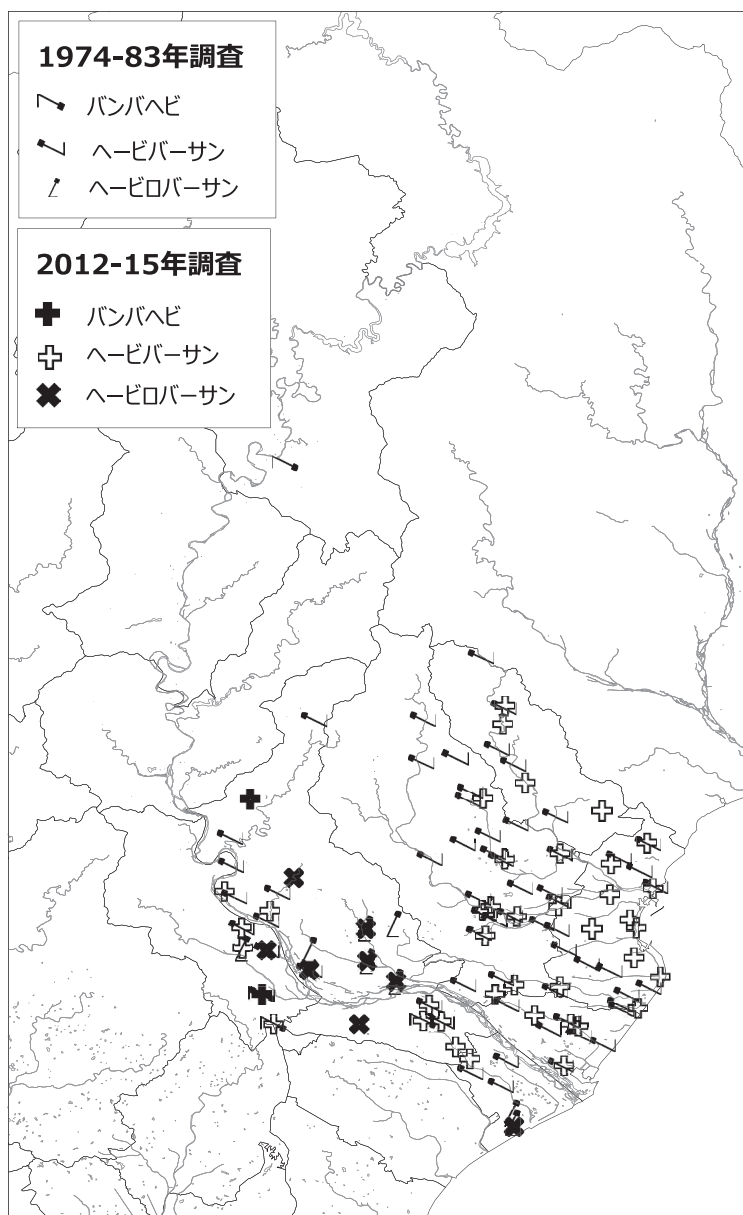


図11 へびバーサンの分布域の変化

いたところへ、藁科川流域を經由し、本川根町へトッカゴが伝播していったと考えるものである。そして木川（2001）では、後者の考え方をとっておきたいとした。このように考えることにより、井川にトッカギがみられること、内田（1936）に大井川の他の地域にトッカゴが全くみられない点などが説明できるからである。なお、トカゲ・トッカゲについては保留した。他の語と同様、「かなへび」と「とかげ」を区別せずに、「とかげ」の共通語形の影響を受けたと考えることもできるが、トッカゲがかなりの勢力を持つ点、静岡県全域でトカゲないしトッカゲが広く分布している点などからみて、決して新しく共通語の影響で用いられるようになったものではないと考えられるからである。

さて、今回の結果を見ると、静岡県内に広い分布域を持つトカギ・トッカギがまず消滅している。さらに古いと考えたトッカゴも消滅の方向に向かっていく。そのトカゴ・トッカゴ、トカギ・トッカギが消滅したところに、トカゲおよびトカゲに促音が挿入したトッカゲが勢力を広げていると見ることができる。これをトカゲ・トッカゲが分布域を広げたと考えるか、共通語の影響と考えるかは、上述のように決定できないところであろう。また、促音の入ったトッカゲは上流域に分布域を広げているように見えるが、その一方下流域では使うとする地点が減少しているようにも見える。実際、本川根町小長井では年齢が下がるとトッカゲが用いられなくなり、トカゲのみとなっている（木川 2006b）。これは、今後全域にわたって見られるようになる現象であろう。

「かなへび」を表す語形で、勢力を持つ語にヘービバーサン類の語がある。これには様々なバリエーションがある。前半部がヘビとヘービ、後半部がバーサンの他バンバー・バンバ・ババー・ババ・バーサ・バーサ・バーバ・バーがあり、図11のヘービバーサンには、これらの組み合わせた様々な語を含んでいる（前半部はヘービが多い）。バンバヘビのようにヘビ・ヘービが後ろに来る形は、大井川流域には少ない。1974-83年調査では4地点に見られたが、金谷町の2地点を除くと本川根町・島田市それぞれ1地点と隣接した地点ではない。さらに2012-15年調査では、2地点となっており、金谷町の1地点は、1974-83年調査で回答のあった地点に近いところであるが、もう1地点は島田市ではあるが、1974-83年調査で回答のあった地点からは離れた地点である。中條（1982）・木川（2001）によれば、ヘビ・ヘービが後ろに来る形は安倍川下流右岸の旧市内付近に多く見られる語であり、この影響によるものとも考

えられるが、詳細については不明である。なお、ヘビ・ヘービが前に来る形は安倍川流域では、左岸長田地区・中藁科地区など大井川流域に隣接する地域に分布している。

さて、ヘービバーサンは30年を経た後でも、その分布域はほぼ同じである。逆に言えば、分布域を広げることがなかったとも言える。さらに、分布域は大きくはかわっていないが、藤枝市を中心に、回答された地点は減っている。その一方、図11ではヘービバーサンと別に示したヘービロバーサン（1974-83年調査の結果にはヘービノバーサン・ヘービノバーサ、2012-15年調査の結果はヘービリバーサン・ヘービロバンバ・ヘービノバーサンを含む）は1974-83年調査において島田市と金谷町および吉田町の6地点のみで回答されているが、2012-15年調査でも、この語形は同じ地域で回答されており、8地点と地点数はむしろ増えている。増加の原因はこの語形を示して確認したことにもよるかと思われる。なお、ヘービロとヘービノの違いについても、それぞれほぼ同じ地点でそれぞれの形が回答されている。ヘービノバーサンは、「ヘビの婆さん」という意識かと想像されるが、ヘービロについては今のところ不明である。ヘービロが先で語源意識からヘービノとなったとも考えられるが、確認することはできない。

4. 肩車

「肩車」の1974-83年調査の結果が図12、2012-15年調査の結果が図13である。この2枚の地図が、「かたつむり」「かなへび」と異なるのは、語の種類が2012-15年調査の方が多い点である。1974-83年調査のみに現れる語がテンガエ・アシダのみであるのに対し、2012-15年調査のみに現れる語はテンピングルマ・カタンバイ・タカンマと3語ある。ただし、1974-83年調査のみに現れる語も含め、これらの語はすべて一地点のみで回答されたものであり、かつ各地の方言集の類でも今のところ確認できないものである。絵を示しての質問に対する回答であるが、なんらかの誤解が生じていた可能性もある。また、中條1982・木川1999によれば、アシダは安倍川中流域および本川根町で「竹馬」を表す語として用いられている。地点としては1974-83年調査で「竹馬」でアシダを用いるとされた地域とは異なっているが、なんらかの混同があったとも考えられる。

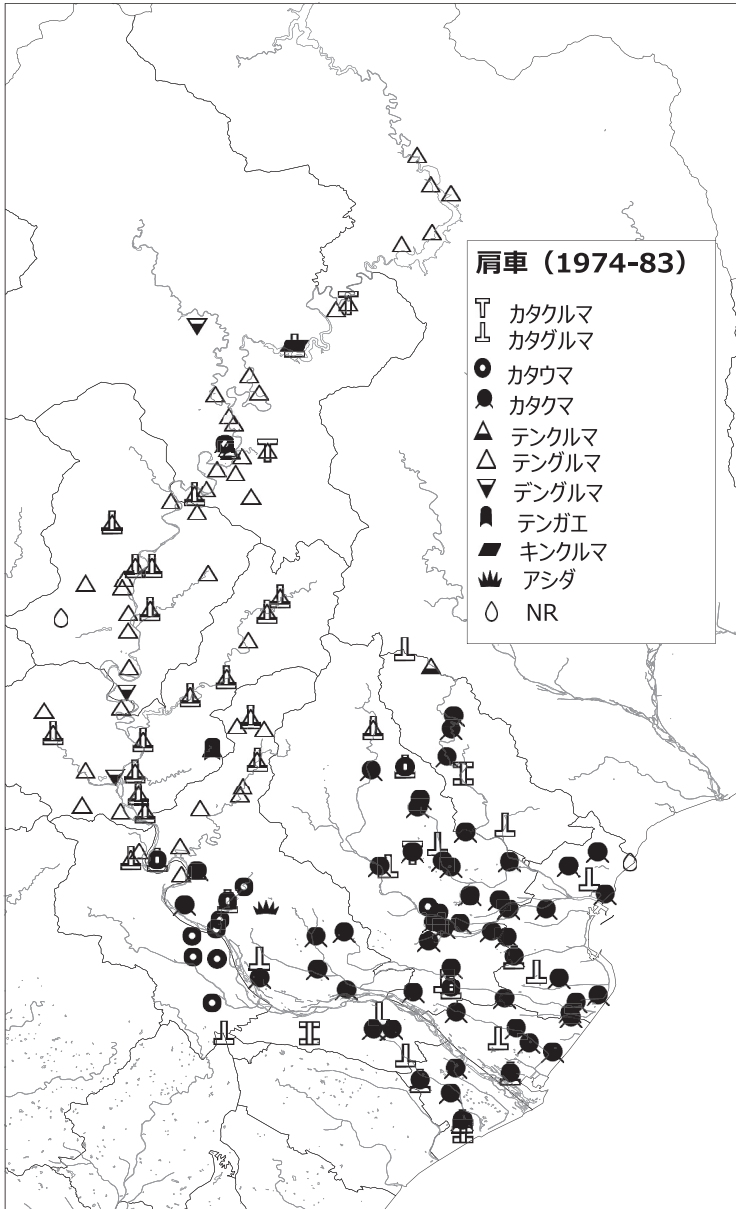


図12 肩車（1974-83年調査）

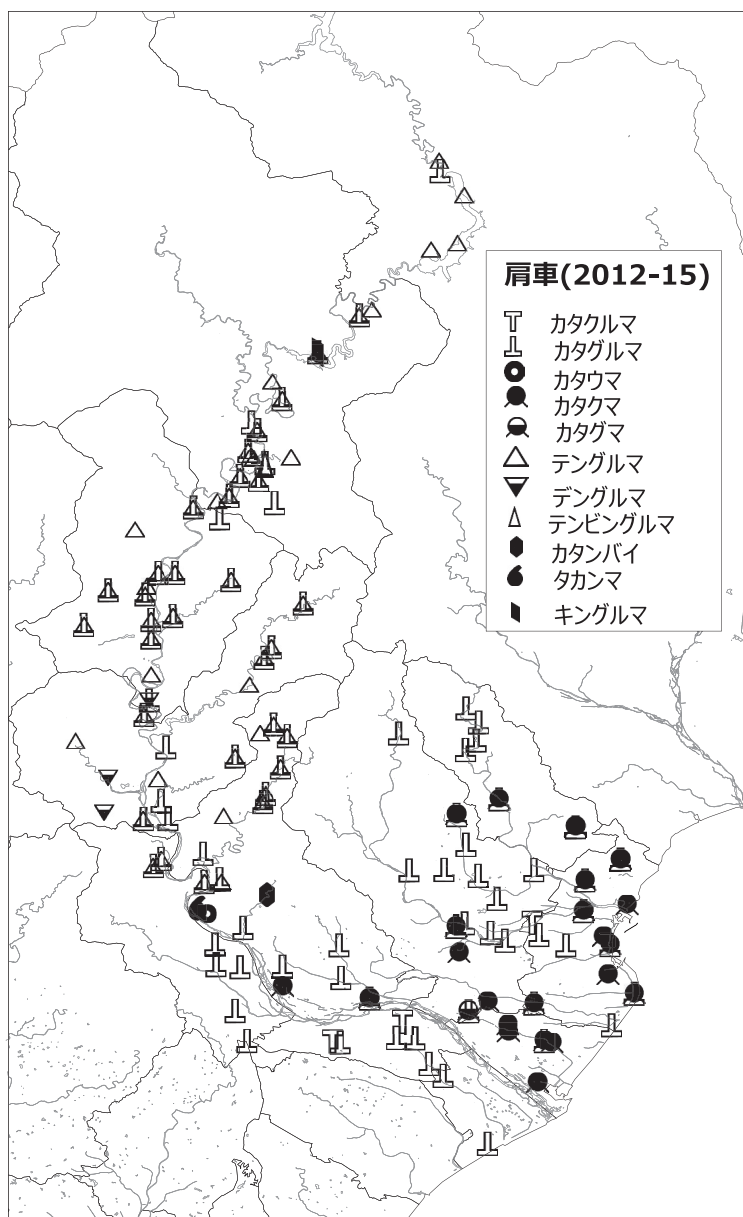


図13 肩車 (2012-15年調査)

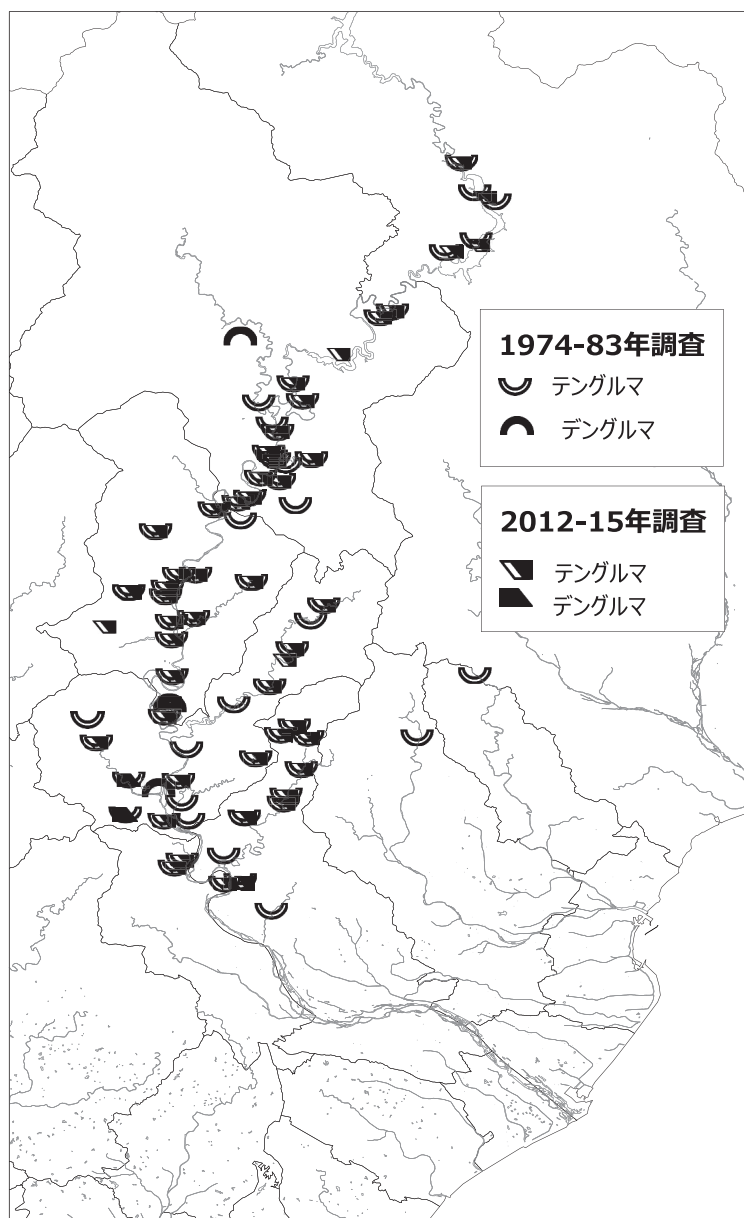


図14 テングルマの分布域の変化

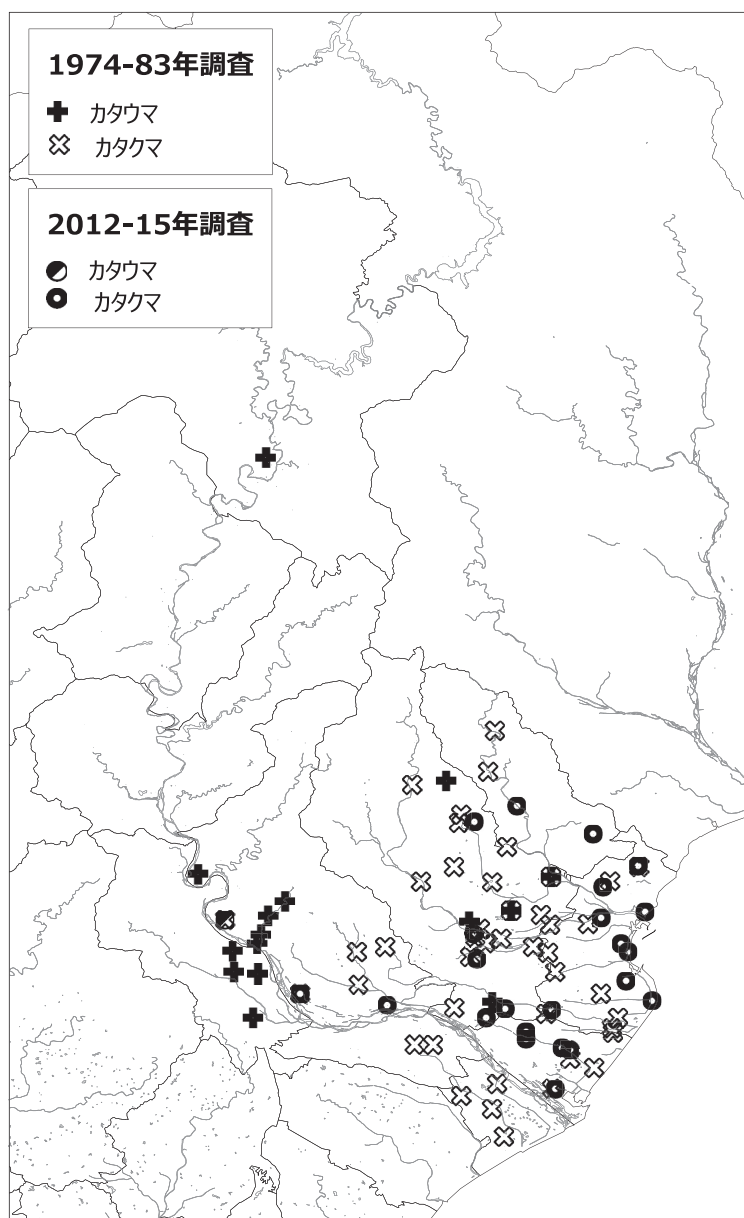


図15 カタクマ・カタウマの分布域の変化

さて、その他の語形を見ると、前半と後半に分けて考えることができる。本地域で現れるのは、前半がカタないしテン・デン、後半がクルマないしくマ・ウマである。一地点でのみ回答があった語もいずれかの要素を含む語がほとんどである。このうち、中上流域に広く分布しているのが、図14で示したテングルマ・デングルマの類である。この地図では、テングルマに1974-83年調査で見られたテンクルマ（岡部町の一地点）とテングロマ（川根町・金谷町・島田市に各1地点ずつ）を含む。また、語頭が濁音のデングルマをテングルマと区別して示したが、2012-15年調査の結果についてはデングルマイ（金谷町の1地点）を含めている。このデングルマは、1974-83年調査では本川根町に一地点あるが、それ以外は2012-15年調査でも川根町および川根町に隣接する中川根町にまとまって分布し、本川根町での使用はなくなっている。テングルマ類の語は、中上流域で広く分布しており、その分布域および使用する地点数は、それぞれ1地点ずつ回答のあった藤枝市や岡部町などで回答がなくなっているのを除き、2012-15年調査でも、大きな変化は見られない。現在でも大きい勢力を持つ語と言えよう。

中・上流域のテングルマに対し、下流域で勢力を持っているのが、図15で示したカタクマである（1974-83年調査の結果としては、カタックマ・カトクマ、2012-15年調査の結果としては、カタグマ・カトコマを含む）。この語は、LAJによれば、全国的に見て、最も新しい語形であると考えられる。また、島田市史資料編等編さん委員会（1992）によれば、大井川の川越しの方法の一つに肩車があるがこれをカタクマと言っていた。すなわち、カタクマはこの地域において長く用いられてきた語であり、かつ全国的に見ても勢力を伸ばしつつある語であったと考えられる。2012-15年調査でも下流域に一定の勢力を持っているが、分布域を広げているわけではない。むしろ、地点数が減っているように思われる。これはカタグマが共通語として勢力を広げていることによるものであろう。

カタクマに隣接して、カタウマ（1974-83年調査のカタンマを含む）がある。木川（1999）では、主に安倍川流域の分布から、最も古い語形をテングルマとし、その後カタウマが伝播してきたが、その後すぐにカタクマが飛び火的に静岡に流入したと考えた。カタウマという語は、カタコマという形もあるところから、カタクマのクマの意味が分からず民間語源から形を変えたとも考えら

れるが、静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会編（1988）によると、遠州にはカタウマないしカタンマが広く分布しており、大井川流域のカタウマは、西に接する地域の影響とみて良いかと思われる。

共通語と同じカタグルマおよび連濁を起こさないカタクルマは、最も広く見られる語である。ただし、1974-83年調査では井川地区に回答がなく、南に隣接する本川根町でも用いる地点は少ない。2012-15年調査でも最上流域は比較的少ない。上記のテングルマの勢力を考えると、2012-15年調査の調査協力者の世代では共通語形がまだ広まっていなかったと見て良からう。ちなみに、連濁を起こさないカタクルマは1974-83年調査では、本川根町から最下流域までに点在しているのに対し、2012-15年調査では下流域に数地点見られるのみである。いずれにせよ、特にまとまった分布をしているわけではない。

5. まとめ

以上、「かたつむり」「かなへび」「肩車」の3項目について、1974-83年調査と2012-15年調査の結果を比較した。木川（近刊）で述べたように、俚言形の分布域に大きな変化はない。しかし、共通語化等の影響でその分布が極端に狭くなったり語によっては使用されなくなった語も見られた。その一方、1974-83年調査であり広い分布域を持っていなかった語が、同じ地域でやはり用いられている場合もあった。従って、かつての分布域の広さや隣接地域での分布が語の残存に、必ずしも常に影響するわけではないことが確認できる。

現在、隣接する安倍川流域の言語地理学的調査を行っているところであり、その結果をあわせ、総合的に考察していきたいと考えている。

本稿は、2011-2015年度科学研究費補助金基盤研究（A）23242024「方言分布変化の詳細解明—変動実態の把握と理論の検証・構築—」（研究代表者：国立国語研究所 大西拓一郎教授）の助成を受けたものである。

参考文献

内田武志（1936）『アチックミュージアム彙報第6 静岡県方言誌 分布調査 第1輯（動植物篇）』アチックミュージアム

太田有多子（近刊）「大井川流域における言語変化を探る」大西拓一郎編『空間と時間の中の

方言』

大西拓一郎編（2016）『新日本語地図－分布図で見渡す方言の世界－』朝倉書店

木川行央（1997）～（2006a）「大井川・安倍川流域の言語地理学的研究（1）～（7）」『静岡・ことばの世界』1～7

木川行央（1997）「大井川・安倍川流域の言語地理学的研究（1）」『静岡・ことばの世界』1

木川行央（1999）「大井川・安倍川流域の言語地理学的研究（2）」『静岡・ことばの世界』2

木川行央（2001）「大井川・安倍川流域の言語地理学的研究（4）」『静岡・ことばの世界』4

木川行央（2006b）『平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書 静岡県下「言語の島」における言語変容に関する基礎的研究』

木川行央（近刊）「大井川流域における言語変化－30年前の調査結果との比較から」大西拓一郎編『空間と時間の中の方言』

国立国語研究所編（1966）～（1975）『日本言語地図』1～6大蔵省印刷局

静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会編（1988）『図説静岡県方言辞典』吉見書店

島田市史資料編等編さん委員会（1992）『大井川の川越し』島田市教育委員会

中條修編（1982）『静岡方言の研究』吉見書店